

『現代人間学・人間存在論研究』第三号のための序

本誌では、これまで“人間学”としての新たな人間学を希求するために、それぞれの筆者が、それぞれの形で人間を説明するための新たな理論的枠組みを導入し、展開することを試みてきた。これは新たに人間を定義していくための〈思想〉的実践であるとともに、まさに人間学という営為における核心部分に他ならない。そのため本誌では、この課題を前号に引き続き本号でも検討していくことにしよう。

本号で主題となるのは、「信頼のゆくえ」というものである。人間が生きるということは、意のままにならぬ〈他者〉とともに生きていくということに他ならない。意のままにならぬ〈他者〉と生きるということ、それはすべてが移ろい、定まらぬなかでも、ともにあることを意味する。堅固だと信じた絆はやがて消え去り、淡い期待は裏切られるかもしれない。それでも人間は、そこで〈他者〉というものを“信頼”してきた。“信頼”は、無限でも永遠でもない。それにもかかわらず、なぜそれは可能だったのか。そしてこのことは、人間存在の本質にとっていかなる意味を持っているのか。これらのことが明らかにされねばならない。

〈他者〉とともに生きるということ——確かにわれわれは、それを指してこれまで「共同」と呼ん

できたかもしれない。だが「共同」が語られるとき、われわれは心のどこかで牧歌的な理想郷を思い描き、人間を歪める何ものかが取り除かれさえすれば、いかなる「負担」も「抑圧」もない、誰もが満ち足り、あまねく連帯した世界が訪れるなどと夢想してはこなかったか。おそらくわれわれが人間である限り、そのような未来などありえまい。人間が〈他者〉とともにあるとき、そこには必ず「負担」や「抑圧」が伴う。そこには人間が人間であるがゆえの、避けられない苦しみと、宿命というものがあるからである。

したがってそれぞれの執筆者には、〈他者〉とともにある人間の原理を読み解いていく際、理想に耽溺することのない、ある種の冷徹さというものが求められる。「信頼のゆくえ」を問うということ、この現代社会において、われわれ自身の「信頼」の未来を問うということでもあるはずである。「自由か抑圧か」、「自発か強制か」、「自律か他律か」、「個か全体か」——われわれはこうした古びた二元論から、そしてそれを克服したとする偽りの弁証法から決別し、真に人間を説明しうる原理へと到達しなければならぬ。そうすることではじめて、われわれは自らが直面する社会的現実の意味を真に掌握し、前に進むことができるようになるだろう。

『現代人間学・人間存在論研究』第三号

編集代表 上柿崇英